

東北大学医学部保健学科

同窓会新聞

Aiセンター研究科に設置!

この度、東北大学大学院医学系研究科にオートプシー・イメージングセンター(Ai)が設置されることになりました。

そこで、今回はAiセンター設置に尽力された先生の一人であり、Aiセンター長でもある石橋先生にお話を伺いましたので、ご紹介いたします。

ごあいさつ



オートプシー・イメージングセンター(Ai)設置について

医学系研究科保健学専攻
画像診断学分野
石橋 忠司

図1 本学におけるオートプシー・イメージング

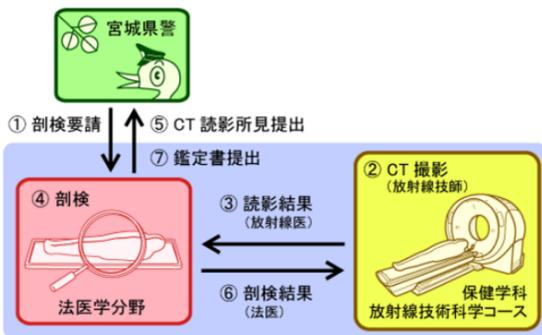
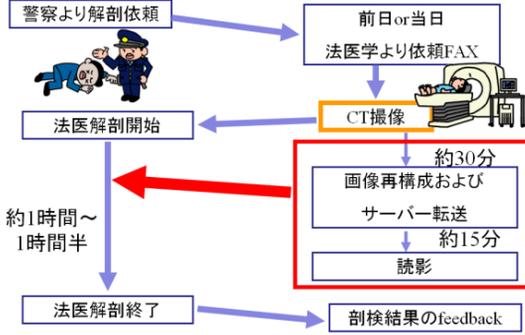


図2 全体の流れ



平成22年4月1日、東北大学医学系研究科にオートプシー・イメージングセンター(Ai)が設置されました。保健学専攻としては初のセンターとなります。このセンターの目的は、死因解明に画像診断を駆使して社会貢献すること、また、この分野での教育者を育成し、同分野での内外の研究をリードすることです。日本は死因不明の社会だと言われています。病院で死亡した場合には、その原因の究明に病理解剖が行われます。しかし、病理医不足などから著しく剖検率が低下しており、医療の質の担保などの観点から問題視されています。病院で死亡した多くは、癌患者の末期などの死因を推測することができず、外科術後など予期せぬ死亡例では、死因不明のままでは患者側の医療不信を招き、訴訟事例に発展することもあります。死後の画像診断によって死因が特定できれば、双方にとって納得できる結果が得られるはずですが、

また、医療施設外での死亡の場合には、医師は死亡診断書を作成するにあたり、事件性が疑われた事案(医療施設内で事件性疑う場合にも同様)では、最寄りの警察署に届け出

しなければなりません。このような事案では司法解剖が行われ、死因が特定されます。事件性なしと判断された事例は、死因不詳などと記載された死亡診断書が書かれてしまい、本当の死因は検索されず火葬されてしまいます。本邦のこのシステムで問題とされるのは、検案する医師の方法です。現在は体表面からの目視のみの判定で、老衰、心不全、死因不詳などと判定されてしまい、その正確な死因は特定されていないことが多いです。

また、事件性を疑い、警察に届け出した場合でも、警察による検視が行われますが、検視は警察学校で100時間前後の教育を受けた刑事調査官(検視官)が目視と状況のみで判定しているにすぎません。客観的な画像診断のような証拠が残されることはありません。検死官の医学教育や知識に乏しいことも指摘されています。皆様の記憶に残っていることと思いますが、2007年、相撲部屋で若手力士が稽古中死亡した事件がありました。遺体を検案した検死官が異常死と判定できず、事故死と判定しましたが、家族が納得で

きずに実家のある新潟県で委託解剖された結果、暴行による死亡と判明し、事件化した事例がありました。この事件をきっかけに、社会的に死因を究明する制度を設けることが望まれるようになりました。

一方、我が国ではCT(Computed Tomography)などの放射線機器の普及は諸外国に比べても進んでいません。死亡時に画像検索することで、死因究明の一助となるのが期待できます。すでに、ヨーロッパやオーストラリアなどの先進諸国では死亡時の画像検索することは当たり前のように行われています。本邦でもこのような画像検索と解剖を組み合わせることで解剖の精度を高める研究がスタートしてきています。

死亡時の画像検索を本邦でいち早く提唱した方は、自ら病理医でもある作家「チームバチスタの栄光」海堂尊こと江澤栄史医師です。彼が死亡時画像をオートプシー・イメージング(Ai:Autopsy Imaging)と名付けたのが始まりです。

以上のような背景と社会的ニーズに応えるべく、平成22年4月1日に東北大学医学系研究科内に、オートプシー・イメージングセンター(Ai)が設置されました。東北大学のAiセンターは東北大学大学院法医学教室で司法解剖される死因究明の一助を目的にスタートいたしました。

本Aiセンターの運用は画像診断学分野(石橋忠司教授、画像解析学(齋藤春夫教授)、法医学分野(舟山真人教授)との共同研究で立ち上がりました。マルチスライスCT、核磁気共鳴装置、3次元画像用ワークステーションを保有し、専門の診療放射線技師の資格を有する教員と、放射線専門医の資格を有する医師の教員と、法医との連携がされている国内でも数少ないセンターと自負しています。同様のセンターは千葉大学、群馬大学から始まり、2010年8月現在、13大学または研究機関で同様のサービスが行われていますが、法医解剖に特化したのが本Aiセンターの特徴です。

図3 Aiセンター外観 警察車両の搬入口



保健学専攻放射線技術科学コース内に教育・研究用に設置されたCT、MRIを用いています。Aiセンターでは、不審死で警察から法医解剖を要請され解剖するにあたり、以下の手順で解剖前に画像検索し(図1・図2)、画像診断の専門家が画像診断を用い、客観的にアドバイスを行なうことで法医解剖、検案書の質を高めています。

本センターでは主にマルチスライスCTでの遺体の撮影と、3次元データ処理、毎月行われるカンファランスなどで、画像と病理との対比を行い、現在多くのデータを蓄積中です。

ご興味のある皆様はぜひ、画像診断学分野、画像解析学分野まで見学にお越しください。

東北大学大学院医学系研究科Aiセンター
〒980-8575
仙台市青葉区星陵町2番1号
<http://www.ai.med.tohoku.ac.jp/>
mail: ai@med.tohoku.ac.jp

「1」オートプシー・イメージングセンターの開所にあたり」
東北大学大学院医学系研究科長
東北大学大学院医学系研究科画像診断学分野 齋藤春夫

「2」東北大学のAiの現況」
東北大学大学院医学系研究科画像診断学分野 齋藤春夫

「3」医療施策としてのAiの現況」
厚生労働省医政局総務課 医療安全推進室長 渡辺真俊

「4」日本におけるAiの現状と課題」
一般財団法人 Ai情報センター代表理事 山本正一

「5」宮城県医師会における医療安全の取り組み」
宮城県医師会副会長 桜井芳明

※終了後、同館にて懇親会を予定しています。

図4 ご遺体搬入口と専用ストレッチャー

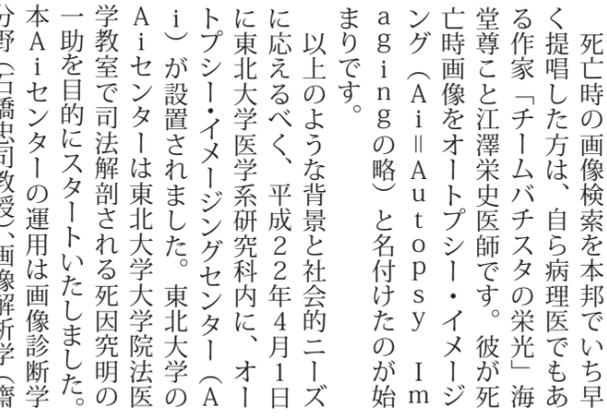


図5 遺体のCT撮影の様子

図6 Aiカンファランスの様子



オートプシー・イメージングセンター設置を記念して、「オートプシー・イメージングセンター開所式記念講演会」が開催されます。お時間のある方は、ぜひ足を運んでみて下さい。

日時:平成22年11月9日(火)
16時30分~18時
場所:長陵会館記念ホール

お知らせ

「1」オートプシー・イメージングセンターの開所にあたり」
東北大学大学院医学系研究科長
東北大学大学院医学系研究科画像診断学分野 齋藤春夫

「2」東北大学のAiの現況」
東北大学大学院医学系研究科画像診断学分野 齋藤春夫

「3」医療施策としてのAiの現況」
厚生労働省医政局総務課 医療安全推進室長 渡辺真俊

「4」日本におけるAiの現状と課題」
一般財団法人 Ai情報センター代表理事 山本正一

「5」宮城県医師会における医療安全の取り組み」
宮城県医師会副会長 桜井芳明

※終了後、同館にて懇親会を予定しています。

お知らせ

オートプシー・イメージングセンター設置を記念して、「オートプシー・イメージングセンター開所式記念講演会」が開催されます。お時間のある方は、ぜひ足を運んでみて下さい。

日時:平成22年11月9日(火)
16時30分~18時
場所:長陵会館記念ホール

卒業生の今： 1 期生からの寄稿特集

保健学科 1 期生の先輩方が卒業してから、今年で早 3 年目です。

先輩方は、病院や企業、大学院など、様々な分野で目覚ましい活躍をされています。そこで、3 専攻の先輩方から、卒業後 3 年を迎えた今の仕事や生活などを振り返るとともに、今後の展望や後輩へのメッセージなどを含めたご寄稿をいただきましたので、少しご紹介します！

看護学専攻

八戸市立市民病院 看護師

堤伸一郎

初めまして、保健学科 1 期生の堤伸一郎と申します。私は八戸市立市民病院で看護師として働いております。今年で 3 年目を迎えました。

これまで精神科と整形外科を回ってきました。現在は脳神経外科で働いております。保健学科の同期生にこの話をしたら、配置転換の速さに驚いていました。実際、3 年間のうちに、3 つの部署で働いたことは大変でした。仕事の流れをつかみ、人にも慣れてきたところで、また新しい環境で働くことになる。再び一からのスタートでした。

しかし、3 つの部署で働いてきたことで学んだことも多くあります。その中で、患者は 1 つの疾患だけでなく入院して来ることはほとんど無いという点、自分はどう動けば良いかを考えられるようになったことがあります。精神科では身体合併症を抱えた人がほとんどで、その合併症が

原因で急変し亡くなった方もいました。整形外科や脳外科でも、時代を反映しているせいか、認知症はもちらんのこと、高血圧や糖尿病、感染症など様々な合併症を持つている患者がいます。看護師として働いている方は分かりますが、夜間せん妄への対応も一苦労です。急性期病院の特徴のため、満床の救命救急センターを経由せずに、ER から病棟へ急患が運ばれてくることもよくあります。このような場合、患者は

どんな症状や病歴があり、どんな薬を飲んでいるか、手術の必要があるか、認知症はあるか、家族関係はどうかなどと考え、優先的に情報を収集し、指示を医師に仰ぎ、行動することができるようになりました。

私はもともと、CNS 志望で就職しました。しかし、希望した部署以外で働いてきて、医師以上に、看護師は幅広い知識と視野を持ち、どんな場所や状況でも対応できるようにする必要があるのでないかと考えるようになりました。そこで今は、自分の志望を決定したり、範囲を限定したりする必要は無いと思っております。様々な経験をしたところで、その時、もう一度自分の道を決めても良いのではないかと思います。

いま、看護師として働いていると、学生時代の実習がほんの一瞬の経験に過ぎなかったと実感します。しかし、実習で学んだことや受け持ち患者との関わりは忘れられず、それが日々の実践に役立っていることは事実です。プリセプターのように、そ

ばで継続した指導を下された教員の先生や臨地実習指導者の言葉も思い出されます。私は東北大学保健学科の学生であったことを誇りに思います。学生の皆さん、勉強や実習だけでなく、その他の場面も含めて、貴重な大学生活をエンジョイして下さい。

福島県 保健師

富樫万里英

私は、保健学科看護学専攻を 1 期生として卒業し、現在、福島県の保健師として難病患者に関する業務を担当しています。働き始め早くも 2 年半がすぎようとしています。今、大切だと感じている事が 3 つあります。

まずは、業務をするにあたって「何のために」ということをきちんと意識することです。また、私にとって課題でもあります。意識すること、「何をしなければならぬか」、その目的達成のための先を見据えた取り組みができます。

次にいろいろな事に興味・疑問を持って、「知る」ことです。仕事をする上でも住民(生活者)と接する上でも、当たり前ですが、様々な福祉制度や税、医療費のしくみ、さらには、農業や季節の食、スポーツ等、本当に様々な知識が必要です。

そして最後に、相談できる人がいることです。学生の時もそうでしたが、職場の先輩や同期、そして同窓生と、悩んだり立ち止まった時に一歩踏み出す勇気をくれる人がいることは大切だと思います。

まだまだ、課題が多いですが、保健学科で学んだことや、これからのいろいろな経験して学んでいくことを大切に成長していきたいと思っています。

放射線技術科学専攻

GEヘルスケア・ジャパン(株) アプリケーション部

内田美帆

私は卒業後、GEヘルスケア・ジャパン株式会社就職しました。現在は T I P アプリケーション部という部署に所属し、C T モダリティを担当しています。部署の冠である「T i P」というのは、「Training in Partnership」の略であり、製品のトレーニングを通じてお客様と強いパートナーシップを築き上げていく、ということを意味しています。部署としての職務はアプリケーショントレーニングです。製品をご購入されたお客様に対して、導入前に研修センターで事前のトレーニング、導入後には直接訪問するオンサイトトレーニング、コールセンターでのアプリケーションサポートなどを行います。どの職務においても、お客様の希望に沿った最適なご提案ができるよう心掛け、操作説明を行っております。

就職して今年で 3 年目になります。徐々にできることも増え、少しずつですが責任のある仕事も任されています。日々学ぶことが尽きず、1 つ 1 つの仕事が勉強とチャレンジの連続です。臨床現場ではなくメーカー就職を選択した私ですが、多くの方々との接する中で、自分自身を成長させていけるよう日々精進していこうと思っています。

もし、MRI に少なからず興味を持っていただけたのなら、ぜひ町田研究室を訪ねてみてはいかがでしょうか？

東北大学病院 放射線技師

村崎晶洋

私は保健学科の 1 期生を卒業し、大学病院に放射線技師として勤めて今年で 3 年になります。今までに部署は 1 年目で一般撮影、2 年目で MRI、3 年目で C T をまわり、1 1 月からは治療をまわります。

就職をしてすぐの頃、新人のオリエンテーションがあり、大学病院には病院が行う診療という役割の他に、教育・研究という、大学病院ならではの役割があると教わりました。教育という役割は、病院に実習などで来る学生へ指導をする事で、研究という役割は、いろいろな装置や設備がある大学病院で最先端の研究を行う事です。

これまでの私を振り返ってみると、教育・研究という役割はまだ十分に果たせていないと思います。実習生からの質問にすぐ答えられない時もあり、自分がやっていこうとする研究も決まっています。大学病院は検査数も多く日々の業務もやはり大変ですが、大学病院に就職したからには、教育・研究というあと 2 つの役割も、これから十分に果たしていきたいと思っています。

検査技術科学専攻

宮城県医師会検診センター

足立直美

私は、宮城県医師会健康センターという検査センターで働いています。担当部署は、血液と尿一般で、血算や血液像のカウント、凝固検査、尿定性検査、尿沈渣など見えています。

仕事内容は、病院の検査室とほぼ同じですが、宮城県内全域の開業医や小規模病院で採取された検体を

集めて処理する所が違いますね。検体数も多いです。血算検体は 1 日に約 1500 ～ 2000 件。仕事時間もシフト制で 7 時半からの早番と夕方からの遅番に大きく分かれます。なので、早番の日は夜、遅番の日は昼と結構自由です。ただ早起きしたり夜遅くなったりと、不規則な生活ですが、だからなのか、検査技師は 20 人ぐらいですが、同世代の先輩が多く人間関係はすごくいいです。

やっぱり働く所の人間関係ってすごく大事だと思います。正しい検査データをきっちり責任もって報告することに繋がると思います。

まだまだ勉強不足で、担当部署以外の分野は忘れていたりしますが、これからもルーチン業務と併せて勉強していきたいと思っています。毎日充実感たっぷり働いています。

東北大学医学系研究所 博士課程後期 1 年

大場浩史

保健学科を卒業してから、あつという間に 2 年が過ぎてしまいました。3 年目の春は、研究テーマの新たな展開を求めて研究室の異動をした事もあり、忙しい日々を過ごしていましたが、半年が過ぎて研究室にも慣れ、研究が軌道にのりつつある事を実感しています。

最近では、卒業研究の学生を研究室に迎え、これまでとは一味違ったにぎやかな空気の中、楽しく研究に励んでいるところです。そして、生協前にある金木犀の甘い香りを嗅ぐと、自分の卒業研究の思い出が鮮明に呼び起されます。2 年前、研究の第一歩を踏み出したときには、あれもこれも教わることばかりでした。「正しく実験ができているのか?」、

「先生との議論がきちんと議論になっているのか?」「発表できるだけの結果が出るのか?」と、手探りで歩みを進めていたことが懐かしく思えます。それが今では教える立場に。学生と一緒に実験をしていると、いろいろな不安を抱かしているのではないかと、自分が不安になってしまいがちです。それでも研究に不安はつきものと割り切って、卒研生と自分の学位に向けて、不安よりも大きい研究の喜びを味わいながら日々を過ごしています。

福島県 竹田綜合病院

山本 肇

私は臨床検査技師として福島県の竹田綜合病院に勤務しています。民間で約1000床を有する福島県会津地方全域をカバーする急性期総合病院です。検査部門は約50人、24時間体制で検査にあたっています。

私は、現在は主に細菌検査を中心に携わっています。起炎菌の同定や薬剤感受性試験のみならず、環境保全検査、院内感染対策として薬剤耐性菌検出状況等の情報発信などの業務も行っています。昨今話題のNDM1や多剤耐性菌、新型インフルエンザなど臨床検査を取り巻く環境は目覚ましく変化し、その都度検査室も変化を続けています。これらのデータを分析し、最近では院内報告及び学会発表を行いました。

また、私は同時に大学院にも在籍しており、病院・大学院での学会や研究活動を通してより専門性に長けた検査技師を目指しています。仕事と大学院での勉強の両立は大変ですが、教授と研究室の院生の皆さんにご支援していただきながら何とかや

やっています。

迅速性と正確性を求められ、検査の遅延や誤報告が医療事故に直結する責任ある仕事ですが、充実した日々を過しています。

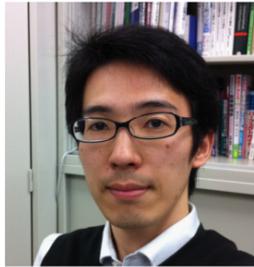
新任の先生のご紹介

今年度も大勢の先生方が本学に就任されました。

ご挨拶を頂戴いたしましたので、ご紹介させていただきます。

緩和ケア看護学分野 助教

佐藤一樹



平成22年4月に緩和ケア看護学分野の助教に就任した佐藤一樹です。この3月まで学生でしたので、ほやほやの新人教員です。学生実習では成人慢性期看護学実習を担当します。東北大学で教員キャリアのスタートを切れ、とても光栄です。

私は東京都出身で大学も就職した病院も都内でしたので、今回が初めての遠距離の引越になります。1月に長女が産まれてすぐの転居で心配でしたが、子どもはすくすくと成長してくれています。仙台の何より良いところは、職場と住居と遊び場所が近いことです。とても楽チンです。現在の上司である宮下先生とは、私の学部時代の看護実習で担当教員として指導を受けて以来の付き合いです。もともと看護師志望が高かった訳ではなく、実習を通して看護の魅

力を理解したと実感しています。知識や技術の習得ももちろん大切ですが、看護の良いところをたくさん知ってもらえるような実習の手助けができると思っています。

看護教育・管理学分野 助教

佐藤みほ



平成22年3月に東京大学大学院医学系研究科博士課程を修了し、5月より看護教育・管理学分野に着任致しました。佐藤みほです。

東京で生まれ、横浜で育ち、大学も大学院も自宅から通学可能な圏内でしたので、現在、初のひとり暮らしを満喫しています。一方で、実家にはとても愛らしいビーグル犬の女の子を置いてきており、淋しさはありますが、実家に帰った際は、彼女は熱烈に大歓迎してくれ、たっぷり遊んでくれます。

私はこれまで、健康な人々に焦点を当て、健康の維持・増進に影響する心理社会的資源について研究を行ってきました。ここ数年は、女性研究者が出産・育児等のライフイベントと仕事を両立させ、研究者としてのキャリア継続を可能なものとする心理社会的環境の探索に対しても関心を向け、研究に取り組んでいます。これは女性看護師においても極めて重要な課題です。こうした研究にご関心のある方は、是非相談に来てくださいね。

皆さんとの触れ合いを楽しみにしています。これからどうぞ宜しくお願い致します。

医用物理学分野 講師

志田原美保



2010年4月1日付けで医用物理学分野の講師として赴任いたしました。自己紹介ということですので、経歴を中心に紹介させていただきます。

私はもともと工学出身で、これまでPET-SPECTといった核医学検査のデータ・画像処理、薬剤動態解析、数値シミュレーションについて研究を行ってきました。2002年3月に東北大学大学院工学研究科量子エネルギー専攻の博士後期課程を修了してから、2002年4月〜12月に国立長寿医療研究センター流動研究員、2003年1月〜2005年12月日本学術振興会特別研究員(PD)、2006年1月〜2010年3月独立行政法人放射線医学総合研究所研究員としておりました。前々職では2004年4月〜2005年12月まで、東北大学加齢医学研究所の福田寛先生の元で研究に従事しておりましたので、また東北大学の星陵地区に戻ってこられたことを嬉しく思っております。

放射線にもともと興味があった私は、放射線を診断に利用する「核医学」にとっても興味をいだき勉強・研究を続けてきました。大学院在学時には、当時の指導教官であった中村尚司先生の寛大なご理解のもと、自分の視野を広げるため2年半ほど、秋田県立脳血管研究センター、国立循環器病センター研究所で研究生として勉強をさせていただきました。在学時以降を併せると宮城、秋田、大阪、

愛知、千葉と様々な土地を経験してきました。いろいろな方言が混ざってしまいきれいな標準語を話すことができません。

日々の小さな発見・感動を楽しみながら、学生の皆さんの教育指導ができれば、と思っております。どうか宜しくお願いいたします。

病理検査学分野 助手

高木清司



平成22年度4月より病理検査学分野の助手に就任致しました。本学に入学したのは6年ほど前になりますが、その当時はまさか6年後も東北大に籍を置いているとは思っておりませんでした。出身校の教育・研究活動に貢献できることを嬉しく思うと同時に、経験が浅いがために貢献どころか迷惑をかけるばかりであることを反省しながら日々を過ごしております。

学部教育科目では主に学内実習を通して学部生の皆さんと接しております。顔と名前が一致しないのが悩みですが、努力しております。もう少しの間だけご容赦下さい。

研究に関しては、乳癌における性ホルモンの意義について研究を行っております。思うような結果が得られないことも多いですが、仲間と励まし合い、競い合いながら過ごす研究生生活は非常に充実しております。

これからの皆様との交流の中で様々な経験を重ねながら成長していきたいと思っております。ご指導ご鞭撻の程よろしく宜しくお願い致します。

研究室紹介

看護学専攻

地域保健学分野

丹治文也



地域保健学分野では公衆衛生学、なかでも疫学という方法論に焦点を当てて研究を行っています。疫学では地域で生活する人々全てを対象とし、がんや循環器疾患を中心とする生活習慣病の成因解明とその予防について学ぶことができます。高齢社会となり、全人口に対する高齢者の割合が増加している今、人々がより長く健康的な生活を送れるような対策を取る必要があります。その中で疫学研究は極めて重要な役割を担っていると云えます。

看護学修士の方々は臨床での経験を積んできた方がほとんどですが、私は昨年、本大学の看護学専攻を卒業したばかりです。私は、修士課程(博士課程前期2年)は研究の方法論を学ぶ場であると考えています。また、看護学の研究が進展していく中、研究の方法論を身につけてから臨床の場に進んでいくことも大学教育を受けた学生の進路の一つではないかと考え、大学院進学を決めました。

地域保健学分野は南優子教授と私の2名のみですが、現在は医科学の公衆衛生学分野の先生方からご指導をいただき、1月の学会に向けて研究を進めています。先生方は医師、薬剤師、看護師、保健師、管理栄養士、作業療法士、理学療法士、臨床工学

技士、また医療系に限らず農学部出身など様々な背景をお持ちです。研究には多角的な知識が必要であり、研究を進める上で素晴らしい環境であると思います。

地域保健学分野に関心のある方は、ぜひ一度研究室にお立ち寄りください。

放射線技術科学専攻

放射線検査学

森島貴顕



本学科の前身である医療技術短期大学部診療放射線技術学科を卒業し、早十数年、職場の理解もあり、社会人学生として修士課程にお世話になっております。

現在、放射線検査学分野の千田研究室で、千田教授はじめ、博士課程1名、修士課程1名の計3名で、研究させていただいております。

本研究室は、放射線検査に伴う被曝の計測評価とその防護、放射線検査機器の品質管理と最適化などに関する研究について主に取り組んでいます。主な研究テーマは「心血管I-V R時における術者被曝防護」、「I-V R時の患者皮膚被曝線量管理」、「放射線画像と被曝線量の最適化」などです。わかりやすく言い換えると、「いかにして、少ない放射線量で診療に十分な画像を提供することができるか？」ということです。

研究室内はみんな仲が良く、わからないことや、疑問に思ったことはお互い聴ける環境です。また、研究

会?と称し、Kスタで楽天観戦等もおこない、交流を深めております。放射線検査学分野に関心のある方は、ぜひ一度教室にお立ち寄り下さい。

医用物理学

西片純基



今回は僕が所属している医用物理学分野を紹介いたします。医用物理学分野は、田村元教授、志田原美保講師、修士1年の西片、卒業研究の4年生6名の計9名で構成されています。

田村教授は、MRIを研究対象としており、特に「吸入酸素によるMRI造影効果」等に取り組んでおり、普段から大病院のMRIを用いて研究を進めています。更に8月には、かつて田村先生が勤務していた秋田県立脳血管研究センターを訪れて、研究を進めました。僕もその時実験補助をさせて頂き、様々な研究者様の話を聞かせてもらい、非常にいい刺激となりました。

4月に着任した志田原講師は主に、PET/SPECTを用いた分子イメージング研究を行っています。特に、放射線薬剤の体内動態解析、小動物PET/CT装置のjQA/QC (quality assurance/quality control) やPET/SPECT装置のモンテカルロシミュレーションによる放射線の挙動解析などを主に進めています。

研究に取り組む一方で積極的に学会の発表を行ったり、普段の授業ではMRIを基礎から物理学的にアプ

ロイチしたり非常に勉強になります。興味がある方はぜひ一度研究室まで足を運んでみてください。

人事異動

看護学コース

平成22年3月31日 辞職

●和田雪

家族・発達精神看護学分野助教

●鈴木和広

地域ケアシステム看護学分野助教

平成22年4月1日 異動

●関亦明子

看護アセスメント学分野講師

↓山形大学医学部看護学科基礎看護学講座

放射線技術科学コース

平成22年3月31日 異動

●高井良尋

放射線治療学分野教授

↓弘前大学医学部附属病院診療科長

お知らせ

東北大学大学院医学系研究科 平成23年度大学院学生募集

●第2次学生募集【追加募集】

医科学専攻修士課程・・・11名

医科学専攻博士課程・・・78名

(医学履修課程)

障害科学専攻修士課程・・・13名
(前期2年の課程)

※障害科学専攻修士課程(後期3年の課程)及び保健学専攻博士課程(前期2年の課程、保健学専攻博士課程(後期3年の課程))は、第2次学生8募集を行いません。

◎入学願書受付期間

1月5日(水)～11日(火)

◎入学試験日 1月27日(木)

◎合格発表日 2月10日(木)

◎入学日 4月1日(金)

●平成23年度第3回 大学院説明会【仙台開催のお知らせ】

◎日時 平成22年11月26日(金) 18時30分～20時(18時開場)

◎場所 東北大学医学部1号館1階 第1講義室

※USTREAMによるライブ中継を予定
<http://www.med.tohoku.ac.jp/movie/>

ご寄稿のお願い

保健学科同窓会では、同窓会新聞を発行しており、多くの方々から好評を得ています。現在、編集委員会では次号発行に向けて準備を進めています。

そこで、同窓生の皆様からのご寄稿を募集します。内容は特に問いませんので、お気軽にお寄せください。お寄せいただく際は、以下の要項でお願いします。

なお、掲載につきましては、同窓会新聞編集委員会での決定後になりますので、掲載が多少遅れます事をご了承下さい。

●内容 随筆、紀行文、趣味など
原稿 2500～4000字程度
顔写真一枚

編集後記

話し合いの場になかなか参加することができませんでしたが、今回初めて新聞作成に携わらせていただき、保健学科の学部生だった頃とはまた異なる視点で、保健学科を見る機会となりました。また、ご寄稿いただいた皆さま、ご協力ありがとうございました。

地域保健学分野
丹治史也

今回初めて、同窓会新聞の作成に携わらせていただきました。今まで何気なく読んでいた新聞ですが、一から作成を始めて完成させるのは、思っていたよりも大変なことでした。しかし、多くの先生方や卒業生の皆さまからのご支援のおかげで、無事に完成させることができました。また、他専攻と関わる良い機会になりました。ご協力いただいた皆さま、ありがとうございました。

看護アセスメント学分野
品川優理

同窓会新聞の作成に携わらせていただくのは今回が初めてで、わからないことも多く、ご迷惑をおかけしてしまったこともありましたが、しかし、多くの皆さまに支えられ、無事新聞を完成させることができました。ご協力いただきありがとうございます。

分子機能解析学分野
藤木夏

昨年に引き続き、今回も同窓会新聞の編集に携わる事ができ、大変嬉しく思っています。今回は、同窓会新聞編集委員会の引き継ぎ後の初の新聞作成という事もあり、上手く行かない事も多々ありましたが、他の3人の頑張りもあって、無事完成する事ができました。次号(第6号)も是非楽しみにして下さい。

放射線診断学分野
高根侑美



平成21年度卒業生の進路状況

